

親の期待研究の動向と展望

筑波大学大学院人間総合科学研究科 渡部 雪子

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 新井邦二郎

A Review of Psychological Studies of Parental Expectations

Yukiko Watabe and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper reviews research on parental expectations from the perspective of correlational factors. First, we review the structure of parental expectation, and then discuss the relationships between parental expectations, study, occupation choices, and the children's goals. Finally, we summarize the studies of parental expectations from the perspective of perceived parental expectations in order to identify issues for future investigation and new directions for research into parental expectations. Based on this review, we argue that it is necessary to construct a scale of perceived parental expectations that encompasses many aspects rather than focusing primarily on the cognitive and emotional aspects of parental expectation. By employing this more comprehensive scale of perceived parental expectation scale, it will be possible to examine the relationships between perceived parental expectations, psychological maladjustment and delinquent behaviors in children.

Key words: parental expectations, perceived parental expectations, well-being, achievement, child behavior

親の期待は、子どもの自己肯定感を育て、子どもにとって支えともなるが、親の期待と自分の願望の間に不一致が生じた場合や、親の期待が自分の能力に対して過剰である場合には負担となると考えられる。期待の強要は、一種の虐待であると言われることもある(岡田, 2004, p.87)。しかしながら、子どもが成長していく中で、期待に対する反発や抵抗を通して自我を確立していくとも言われている。このように考えると、子どもが自分の価値観や目標を設定し自我を確立していく上でも親の期待が果たす役割は大きいであろう。現代は、少子化が進み、親が子どもを自分と同一化し、子どもは一身に期待を背負わなければならないという状況がある一方で、子どもに関して無関心で全く期待をしないという親も増加していると考えられる。このような社会状況の中で、子どもに期待することは悪い事のようにあ

るいはその反対に当然の事のように、期待する人とされる人の関係性や期待されることによって生じる認知が無視された状態での議論が浸透している可能性がある。期待そのものではなく、期待するプロセスや期待の認知に注目していくことによって親子の関係性の中で期待の効果を適切に生かす事ができると考えられる。すでに親側の視点から期待の認知を扱う利点が明らかになっている。Russell (2003) は、親が自分の抱いている期待を意識し、変容させることで適切な期待を抱くことができるようになることを明らかにしている。期待することは良い事あるいは悪い事とするのではなく、期待のもつ効果について具体的に明らかにしていくことによって臨時的な意義が得られると考えられる。親が自分の抱いている期待を意識することをどのように援助することができるのか、親が抱く期待の構造・心性・認知

などについて明らかにする必要がある。また、同時に、期待を受ける子ども側の視点から捉えた子どもの認知に注目した研究を蓄積する事によって親の期待に子どもがどう対処し、自分とは異なる価値観に対してどのように耐性を身につけていくのかというプロセスにも着目することができるだろう。

本稿ではこういった視点を念頭に置きながら、親の期待研究がどのような側面から研究されてきたのかを概観し、改めて、親の期待のプラス面とマイナス面を明らかにする。さらに親の期待に対する子どもの認知という観点から研究を総括することにより、親の期待について新しい示唆を見出すことを目的とする。まず、親の期待領域に関する研究を概観し、次に親の期待と関連する諸要因に関する研究を概観する。最後に親の期待に対する子どもの認知に焦点をあてた研究について概観し、今後の課題を検討する。

親の期待領域の検討

親は子どもにどんな期待を抱いているのか、またその期待は子どもの年齢によって異なるのかといった事に関する研究が行われてきた(松本・渡辺, 1993; 谷脇・藤田, 2006)。また、親の抱く期待領域や期待の程度は時代背景や、文化的な背景によっても異なる事が予想される。

中山(1992)は母親からの達成期待に焦点を当て、母親が実際どのような達成領域に対して価値を置き、子ども達にその達成を期待しているかに関して子どもの学年や性別・出生順位との関連から検討を加えた。その結果、家庭でも学校でも仲間との協調的關係や共感、あるいは自己主張など社会的・対人的なものへの期待が高く、親和的対人關係の維持が重視されるわが国の社会的価値観を反映していることが明らかになった。発達的には学年と共に学業達成に関する期待や圧力が単調増加的に高まり、次第に社会的な達成期待からの移行が起こることが見出されている。子どもの性別や出生順位による母親の期待の差はほとんど見出されず、そうした伝統的な役割意識が希薄化していることが示唆された。

近年、親がどのような領域に期待するのかという研究だけでなく、期待されている領域を子どもがどう認知するのかということが検討されるようになってきた。庄司・藤田(2000)は、大学生が想起した中学生の頃の親の養育態度と親の期待の関連について検討し、子どもが認知している親の養育態度によって親がどんな領域に期待していると思うかの認知が異なることを明らかにした。期待領域として、

人間的成長、社会・経済的地位達成、良い子、結婚・家庭生活、社会貢献、健康性、身体的活動、友人關係、進学・学歴が取り上げられている。親の情緒的支持、同一化、統制、自立性否定がそれぞれ子どもから見た親の期待に対して、どのように影響しているのかを明らかにしている。その結果、父親及び母親の統制、自立性否定は子どもから見た親の期待に対して極めてわずかな影響しか持たないことが示されている。そこで、庄司・藤田(2000)は子どもから見た期待に対し有意な影響を持つ、父親の“情緒的支持”“同一化”および母親の“情緒的支持”“同一化”に着目し、検討を行っている。親の“情緒的支持”は子どもから見た親の期待の“自己実現”に対しては正の影響を与え、“社会的評価”に対しては負の影響を与えている一方で、親の“同一化”は、親の“情緒的支持”とは反対に、子どもから見た親の期待の“社会的評価”に対して正の影響を与えている事がわかった。

親の養育態度によって子どもがどの領域に期待されていると感じるかが異なるという事が示された事は重要な意味を持つと考えられる。しかし、どの領域に期待されていると感じるかによって子どもの精神的健康や行動面などの適応との関連がどのように異なるのかといった検討はなされていない。

従来の研究では、期待領域は同等で並存的な価値観として扱われてきたが、複数の期待領域を扱っている研究における因子分析の結果いくつかの因子に領域が分かれることなどが明らかになってきている。Oishi & Sullivan(2005)では、因子分析の結果、領域が4領域に分類され、Wang & Heppner(2002)では、様々な期待の領域が人間成長因子・学業達成因子・交際相手因子の3因子に分類されている。河村(2003)においては、“進学・学業期待”“社会への適応期待”“就職期待”“従順・見栄期待”“苦勞への報い期待”の5つの因子に分類されている。また、庄司・藤田(2000)の研究においては、因子分析後の期待領域の背後にある潜在変数(自己実現・社会的評価)の及ぼす影響の違いが明らかにされている。これらを踏まえて今後、親の期待の特性に基づいて期待を分類していく必要があるのではないだろうか。また、子どもが期待されている領域をどう認知するのかということにおいて、期待の領域ごとに期待に対する達成感などの認知が異なった場合、期待領域が個々に並存的なものではなく、ある程度達成水準において段階を持った構造であるとも考えられる。

このように考えると、今後、期待領域においても親側からの視点だけでなく、子どもの認知面に焦点

を当てた分類を行い、さらに期待の構造について明らかにしていく必要があるといえよう。

親の期待と関連する要因の検討

子どもの学業・進路との関連

親の期待研究においては、子どもの学業との関連を扱った研究が数多く行われてきた (Guiping, Shulan, & Qicheng, 1993; Patrikakou, 1996)。期待が学業においてプラスの効果をもつというのは、理解しやすい。子どもが学業に取り組む際、親の教育目標を取り入れている可能性が高いと考えられるからである。これまでの研究から、親の期待がどのように子どもの学業成績に影響するのが明らかにされてきた。Englund, Luckner, Whaley, & Egeland (2004) は、親の期待と子どものパフォーマンスの相互作用について扱っている。その結果、親の教育水準が入学前の親の教授方法に影響→親の教授方法が子どもの知能に影響→知能の高さが良い成績をもたらす→子どもの高いパフォーマンス→親は高い期待と関与を持つ→良い成績がもたらされるという一連のプロセスが明らかになった。親の期待が子どもの学業成績に影響するというプロセスが、一方的に子どもに影響するものとしてではなく子どものパフォーマンスとの相互作用の中で説明されている点が新たな観点であるといえよう。

親の期待が学業成績に直接影響しているとも考えられるが、期待が子どもの自己概念やコンピテンスに与える内的な影響によって学業成績を説明している研究もある。木澤 (2004) は、親に期待されると感じている者は、期待されていないと感じている者よりも勉強に自信を持っている傾向が高いことを指摘している。また、Benner & Mistry (2007) では、親の期待は子どもの学業コンピテンスに対する知覚や信念に影響をあたえるだけでなく、実際の学業成績にも影響することが明らかにしている。

こうした親の期待と子どもの学業との関係が明らかになるにつれて、最近の研究では、学業的な親の期待が子どもにどう認知されるのかという期待の認知に重点が置かれるようになってきている。

Chen & Lan (2006) によれば、学業的な親の期待が子どもによってどう認知されるのかは親と子のコミュニケーションの中で認識されるとされている。このコミュニケーション過程には、文化差があり、中国の学生はアメリカの学生よりも学業的な期待を達成するための親のアドバイスやケアを積極的に受け入れていることが示された。Chen & Lan (2006) は、親の期待の影響を認識する過程に焦点

を当てる必要があると指摘するとともに、親の期待がどんな条件で最も効果的に伝えられ、子どもによって受け入れられるかに焦点を当てる必要性を強調している。

以上のように親の期待と学業に関する研究が進められてきたが、親の学業への期待の先にあるものは、職業選択・将来に対する期待であると考えられる。そこで、次に、親の期待と子どもの職業選択について検討している研究について紹介する。

田中・小川 (1982) は、親の期待と親への同一視が子どもの教職の継承に及ぼす影響を検討した。親が教職であるものについては、子弟が教職を希望する教職継承群と教職を希望しない教職非継承群に分け、両群の比較を行っている。さらに親が公務員職、農業職である子弟のうち、教職を希望するものを教職希望群と呼び、先の教職継承群と区別し、継承群と希望群の比較を行った。高校時代から現在にかけての親の教職への期待と子弟の教職選択の関連を分析した結果、教職継承群は希望群に比べて持続した親の期待を担っていると認知していることが明らかになった。教職期待における継承群と希望群の差異は継承群の場合、親の期待が高校・現在と持続しているのに比べ、希望群では高校よりも現在に集中している点にある。継承群では、親の期待が早期に形成され、長期にわたって子どもに影響を及ぼしていると考察されている。

職業を選択する過程に関する研究もなされており、Salimi, Mirzamani, & Shahiri-Tabarestani (2005) は、親の期待は高校生の職業不安と教育不安に影響することを明らかにした。また、Jacobs, Chhin, & Bleeker (2006) は、親の性別ごとの職業に対する期待は子どもが自分自身に対して抱く期待と実際の職業選択に関連し、職業満足感は親の性別ごとの職業に対する期待に基づいた職業についたかどうかと関連していることを示している。

このように、親の期待が職業の継承や職業選択に影響するだけでなく、職業を選択する過程で職業不安に影響するということや、職業を選択した後も影響するという点が興味深い。職業選択が、親の職業の継承に限定されなくなっている現代において、職業意識が薄れ、職業に就かない若者が増えている。こうした背景には、若者が希望を抱けず、しっかりとした将来展望を自ら築く事が難しくなっているからであると考えられる。永井 (2006) は、子供の頃に家族から期待されていた人のほうが期待されていなかった人よりも現在、希望を持つ割合が高いと述べている。幼い頃に期待されることによって、自分の将来に希望を持つ事ができ、具体的な将来展

望を描くことができる。また、成長して、職業を選択する際に受ける親からの期待は、職業に対して直面化させられることによって一時的に職業に対する不安を高めると考えられる。しかし、不安を克服する過程で自分の将来と向き合い、職業選択をするきっかけとなる可能性もあるだろう。

親の期待と子どもの目標

親の期待が学業・職業選択に関連するという点に関する研究について紹介してきたが、子どもはなぜ親の期待に応えようとするのかということについて遠山(1999a)は検討を行っている。小・中学生がどのような理由に基づいて親の期待に対する態度を決定するのかについて検討し、“内容の妥当性”“現状や能力との比較”“自己の志向性”“利益と不利益”“他者の利益、他者との関係”の5つのカテゴリーがあることを明らかにしている。親子関係以外にこれらのような5つの要因が親の期待に応えようと思う・思わないという決定に影響する可能性を示唆した。特に、“自己の志向性”“利益と不利益”が影響する可能性が強いとしている。こうした要因だけでなく、期待に応える際には親の期待と自分自身の目標が関連すると考えられる。そこで、以下に子どもの目標と親の期待についての研究を示す。

Goyette & Xie (1999) は、親の教育期待の高さが子どもの教育期待の高さと関連していることを指摘し、親が高い教育水準を期待していると、子ども自身も高い教育水準を目標に持つことを明らかにした。

遠山(1999b)は、親子関係や親の期待と子どもの目標がどのように関連するかについて検討し、小学生は親子関係が良い、良くないにかかわらず認知している父親・母親の期待と自らの目標が結びついていることを明らかにした。親子関係が良い場合に認知している父親・母親の期待と自らの目標はどちらも高いことが示されている。中学生は親子関係が良い場合に、良くない場合より子どもの目標は親の期待に影響を受けるという指摘がなされている。さらに、認知している親子関係と意識している親の期待に対して応えようと思うかどうかとの関連を検討し、小学生・中学生どちらにおいても親子関係が良い方が日常生活の中で意識している親の期待に応えようとする傾向が部分的に明らかになっている。親の期待と子どもの目標が一致している場合期待はプラスの効果をもつと考えられるが、親の期待と子どもの願望や目標にズレが生じた時に不適応が生じると考えられる。塩田・村上・大橋(1956)は、親の期待と子どもの願望のズレあるいは不一致のパター

ンに着目し、それが子どもの人格的特性とどのような関係にあるかを検討している。進学の問題についての親子の一致・不一致の分析を行った結果、全般的にみて現在の生活に関する問題においてよりも将来の問題について、親子の一致率が一層高まることが明らかにされた。また、親子の期待-願望の一致、不一致の型は一般に共通するものとして、“高い一致型”“低い一致型”“期待過大の不一致型”“願望過大の不一致型”の4つの典型的な型に分類されている。

親の期待の認知と子どもの諸問題

従来、親の期待は教育目標や進路、学業といった側面との関連性が指摘され、研究が行われてきたが、子どもの精神的な健康や問題行動との関連なども注目されるようになり(村田, 1999; 山田, 2004)、親の期待が子どもの精神的健康や行動面に与える影響についての研究が行われるようになってきている。初めに、子どもが認知した親の期待の程度と精神的健康との関連に着目した研究について紹介する。

河村(2003)は、いくつかの期待領域にどの程度期待されていると思うかの認知に焦点を当てて精神的健康との関連を検討している。“進学・学業期待”、“社会への適応期待”、“就職期待”、“従順・見栄期待”、“苦勞への報い期待”の5つの期待にどの程度期待されていると感じるかを扱い、親からの期待が高いと感じると完全主義傾向も高いということを見出している。特に男子においては父、女子においては母というように性別が同じ親からの期待を強く認知していると完全主義傾向も高いことがわかった。心理的距離の違いによる期待の完全主義への関連も検討されていたが、心理的距離の違いによって期待の完全主義への影響が左右される事は支持されていない。

Brain & Resse (2007) も、親の期待を高すぎると認知する事と親からの批判は後に精神疾患、神経症的完全主義や社会不安(social anxiety)を導くとしている。親の期待と親の批判の間に正の相関があることも指摘されている。親の期待が親からの批判と受けとめられた場合は、親からの非受容感を生み出し、後に精神疾患につながるという事が明らかになっている。

Crystal, Chen, Fuligni, Stevenson, Hsu, Kitamura, & Kimura (1994) は、期待の強さの認知と精神的健康の関連だけでなく、行動面との関連も検討している点で興味深い。親の学業に対する期待の程度

の認知や親の学業に対する満足感と子どものストレス・攻撃性・学業不安・身体化問題などとの関連をアメリカ、中華民国（台湾）、日本の高校生で比較している。その結果、日本の学生は最も、親が学力に関して満足していないと感じているだけでなく、親の期待が高すぎると認知していることが明らかになった。日本の学生においては、親の期待を高すぎると認知する学生は親の期待を低く認知しているものに比べて学業不安が高く、頻繁に身体化問題を示すことがわかった。アメリカの学生は、期待を高すぎると認知すると、抑うつや攻撃性、身体化問題が高まる事が示されている。台湾の学生については、期待が高すぎると認知すると、ストレス、学業不安、攻撃性、身体化問題が高まる事がわかった。日本の学生の場合、親が成績に満足していないと感じると攻撃性が高まる事が示されている。文化によって、親の期待の認知と行動面や精神面との関連が異なっていると考えられる。日本の学生は他の国と比較すると親の期待が高すぎると認知しているが、攻撃性や抑うつが3カ国中最も低く、適応が良いことが示されている。しかし、なぜ日本の学生の適応が良いのかという点について説明が十分とはいえない。学業という一領域に絞って、期待の強さの認知のみを扱った結果、日本の学生の心理的問題との関連が説明しきれなかった可能性も考えられる。親の期待と精神的健康・行動面の両面から検討している論文は数少ないため、貴重な示唆が得られているといえるが、問題点として親の期待を強さの認知の観点だけから検討していることと期待領域が学業に限られているということが挙げられる。

期待の強さの認知は、自分の認知した期待へどの程度応えられていると思うかという認知と期待の要求水準とのズレとして検討されるようになっていく。強さの認知からさらに踏み込んで、能力と期待とのズレを捉えているのが、期待にどれだけ応えられていると感じるかという充足感の認知である。充足感の認知は、精神的健康との関連が複数の研究で指摘されている認知要因である。Oishi & Sullivan (2005) は、大学生の主観的な幸福感と認知された親の期待の充足感との関連を検討している。アメリカの学生と日本の学生の文化比較を行った結果、アメリカの学生は日本の学生よりも人生に対する満足度と自尊心が高く、日本の学生よりも親の期待を充足していると感じており、ウェルビーイングの文化的な差異は、認知された親の期待の充足感によって媒介されている事が明らかになった。つまり、認知された親の期待がウェルビーイングの文化差に重要

な役割を果たしているということである。Wang & Heppner (2002) の研究においても、認知した親の期待と認知した自己のパフォーマンスの差異を検討している。親の期待そのものよりも親の期待を達成できていないと感じる方が、抑うつと関係していることを明らかにした。このことから、親の期待そのものが子どもの精神的健康に影響を与えているのではなく、期待されていると感じる程度をどれだけ達成できていると感じるかという認知が精神的健康を左右しているといえよう。

この結果は前述した Crystal, et al. (1994) の研究結果において、日本人学生の認知した親の学業成績に対する親の満足感に対する低い認知と類似した概念である親の期待の充足感の低さは一致するが、米国の学生と比較して精神的健康の指標であるウェルビーイングは低く、抑うつは高くないという若干の矛盾が生じている。このことから、日本人における親の期待の認知と精神的健康の関連を親の期待への充足感という単一の認知から予測することは結果が不安定になると考えられ、今後多角的な検討が必要であると思われる。また、Wang & Heppner (2002) は、アジア系の学生はヨーロッパ系の学生よりも親の期待がより学業成績にあると認知しやすく、この学業成績に期待されているという認知が、認知された親の期待の充足感における違いに関連することを見出した。実際にアジア系の学生の親は、学業に期待している可能性も高いと考えられるが、期待の領域と期待に対する充足感の認知の関連性が明らかにされた事から、どの期待の領域に期待されていると感じるかという認知がどう関連するかということについてもさらに検討していく必要がある。

赤星 (2007) は、庄司・藤田 (1999) の子どもから見た親の期待の質問紙を用いて、親の期待と子どもが親の期待に応えられていると感じる達成とのズレに着目し、そのズレが孤独感と自己効力感にどのように影響しているかを検討している。その結果、孤独感が低くなるにつれ期待に応えられていると感じ、自己効力感が高くなるにつれ期待に応えられていると感じるということを明らかにしている。子どもの精神的な状態が期待への充足感の認知に影響している可能性が示唆されている。従来の研究は、親の期待の認知が精神的健康に影響を与えるという捉え方であったが、反対に子どもの精神的な状態が期待の認知に影響するという事が示されたことは興味深い。しかし、親の期待に応えられないと親との関係が悪くなり、孤独感が高まる、あるいは期待に応えられないと期待を達成できたことによって自己効力

感が高まるといった従来指摘されている流れも考えられるため、今後期待の認知と関連すると思われる要因を双方向的な視点から検討することが必要となるだろう。

精神的健康と親の期待との関連においては、自分の能力と期待の強さの認知・期待への充足感の認知・どの領域に期待されていると認知するかなどが検討されていることが明らかになった。今後は、複数の期待に対する認知について同時に検討し、精神的健康との関連をより多角的に明らかにしていく必要があるだろう。また、近年の子どもの状況を考慮すると、精神的健康との関連だけでなく、子どもの様々な行動との関連性の検討も行っていく必要があると考えられる。子どもが親の期待を受け実際にどのような行動をとるのかという事は、適応を考える上で重要であるといえるからである。以下に親の期待と子どもの行動面について検討した研究についてみていく。

子どもの行動面と親の期待の関連性を検討する際には、異なった認知の側面が影響している可能性が示唆されている。例えば、Simons-Morton (2004) は、喫煙行動の開始と親の期待（親の喫煙行動に対する考え方を子どもがどう認知しているか）について検討し、親の期待が喫煙行動に対して負の相関を持つ事を明らかにした。つまり、親の期待は子どもを喫煙から守る最も重要な養育行動であるということが示唆されたのである。親の期待が子どもの行動においてどのような影響を及ぼすかは、子どもに親の期待がどう伝わっているかによって異なってくるといえる。子どもに期待が伝わっているかどうかの指標となるのは、子どもが親の期待する行動を取らなかった場合に、親がどう思うかという親の認知に関する子どもの認知であることが明らかになった。子どもの問題行動などとの関連を検討する場合には、こうした親の期待する行動に対する親の認知を子どもがどう認知しているかという面にも焦点を当てていく必要があると考えられる。

子どもが認知する親の期待について述べてきたが、期待の認知は強さ・充足感・期待される領域といった子ども自身の認知もあれば、親の認知についての子どもの認知もあることが示唆された。さらに、子どもの親の期待の認知に影響すると考えられる要因について検討を加えている研究がある。

Singh-Manoux, Fonagy, & Marmot (2006) は、養育態度を厳格さ・情動的な温かさ・親の期待の3つの観点から検討しており、養育態度のなかでも、親の期待が成人の成功に最も強く関連していることを示した。厳格さは成人の達成に負の関連、親の期待

は成人の達成に正の関連がある事を明らかにした。情動的な温かさが低すぎる場合や高すぎる場合は成人の達成が低いことと関連していた。ここで扱われている親の期待は成人が認知した親の期待であり、“全てのことにおいてどのくらい自分のベストを尽くすように期待されていると感じるか”という項目を用いて測定している。こうした親の期待の認知が強いほど成人の認知的な能力や社会的地位の達成が高いという期待のプラスの側面を明らかにした。ただし、期待に関する質問項目が1項目であるという点で更なる検討が必要であらう。自分のベストを尽くすように期待されていると感じるという認知は自己決定感や自分の価値観を否定されるような期待ではなく、全力を尽くすことの大切さに重点がおかれているために、こうした期待の内容によって期待への認知が異なり、期待の効果が異なる可能性があるのではないだろうか。期待の内容によって期待の捉え方に差が生じるかどうかを今後検討していく必要があると考えられる。期待の内容だけでなく、子どもの期待の認知に影響する要因として、親が期待の方向性をどう抱いているのかという問題がある。親が期待の方向性（プラスの方向に期待しているか、マイナスの方向に期待しているか）によって期待の効果が異なることがすでにMadon, Guyll, Spoth, Cross, & Hilbert (2003) によって指摘されている。親の抱く期待の方向性によって子どもの期待に対する認知が異なった結果、期待の効果が異なるという可能性も十分に考えられる。

Madon et al. (2003) は母親の期待が子どもの飲酒行動にどう影響するのかについて、自己充足的予言の観点から研究を行った。子どもの自尊感情、家族の社会的地位、母親の期待の誘発性が飲酒行動を和らげるのかどうかを検討している。不正確な期待が自己充足的予言を高めることから、母親の不正確な期待に着目して分析を行っている。その結果、母親の期待と将来のアルコール使用の関係において自尊感情が高い子どものほうが低い子どもよりも強い交互作用があることが明らかになった。母親の不正確な期待において、子どもの飲酒を過小評価するポジティブな期待のほうが子どもの将来の飲酒を過大評価するネガティブな期待よりも子どもの将来におけるアルコール使用に予防的な役割を果たすことがわかった。親がネガティブに期待するか、ポジティブに期待するかという事は自己充足的予言の“予期が、無意識のうちに予期に適合した行動に人を向かわせ、結果として予言された状況を現実につくってしまう”（川上, 2003, p.331）という定義から考えれば、重要なことであると考えられる。高い自尊心

情を持つ子どもは低い自尊感情の子どもよりも自己充足的予言により敏感であり、自己充足的予言が有害ではなく援助的に働くことがわかった。また、高い自尊感情を持つ子供の母親の方が子どもに対して正確な期待を持っていることも明らかになった。このことから、期待の正確性と期待の方向性が子どもの自己や自分の行動に対する認知を作り出していると考えられる。以上のようなことから、子どもの親の期待の認知に影響すると考えられる親の抱く期待の内容や期待の方向性についても今後検討していく必要がある。

期待の認知を扱った様々な観点の研究を総括した結果、子供側親側のさまざまな認知の側面に焦点をあてる必要性が示唆された。そこで、最後に、比較的多くの認知変数を扱っている研究について検討する。

河村（2002）は、大学生が親からの期待をどのように捉え、どのように対処してきたかについて検討している。

家族・両親との関係についての満足度を測定し、親からの期待内容・期待の捉え方・期待への対処の仕方について自由記述で調査を行っている。期待の捉え方については、自由記述で得られた回答を基に、“嬉しい・励み”“納得”“嫌”“重荷”“特に何も感じない”の5つのカテゴリーが設定され、期待への対処の仕方については、自由記述で得られた回答を基に、“期待に応じた（積極的）”“期待に応じた（消極的）”“無視、聞き流した”“反発した”“自分なりにできることをした”“話し合った”“よくわからない”の7つのカテゴリーが設定された。期待の捉え方の上記5つのカテゴリーについてそれぞれの受けとめをした際に、どのような対処が行われるかについて検討し、期待の捉え方の各カテゴリーにおける、期待への対処の仕方の上記7カテゴリーの数を調査している。その結果、期待を肯定的に捉えた場合、すなわち：“嬉しい・励み”と捉えたときには期待に応えることがほとんどである事がわかった。期待を否定的に応えた場合、すなわち：“嫌”“無視、聞き流した”“反発した”などの対処がなされることがわかった。また、状況を建設的に変えていこうとする“自分なりにできることをした”“話し合った”という対処の仕方も見られた。しかし、“嫌”と感じても“期待に応じた”という対処の仕方が“無視、聞き流した”“反発”したものと同程度存在している事が示された。重荷という捉え方については無視という対処の仕方が見られる一方で期待に応じたという対処の仕方も取られているということを見出している。

従来あまり取り上げられてこなかった子どもの期待に対する感情面や認知面に焦点を当てた複数の期待の認知を取り上げ、その期待の認知によって対処方法が異なるという新たな観点が明らかにされた事は、大きな意義がある。しかし、期待の捉え方の各項目の回答者数に大きな差異があるという問題があり、統計的な処理が不十分であるという点においても今後さらなる検討が必要であると思われる。自由記述回答を基盤として分類を行っているが、質問紙を作成して数量的な研究を行うことができるかも知れない。

親の期待研究の課題と展望

親の期待研究について関連する変数に沿って概観し、親の期待の認知という観点から研究を総括してきた結果、親の期待研究には様々な観点が有り、課題も残されていることが明らかになった。第一の課題として、期待の効果（プラスに働くのか、マイナスに働くのか）については、研究結果が一致しているものもあるが、一致していないものもあるという点が挙げられる。期待の効果が一致していない原因として、期待の定義が研究によって様々である点、また対象が親の抱く期待なのか、子どもが認知した期待なのかという違いによって生じている可能性がある。期待の定義については、期待をプレッシャーとサポートとして扱っている研究（Liu, 1998）、親からの批判あるいは養育態度の厳しさと親の期待の間に相関があるとする研究（Brain & Resse, 2007; Singh-Manoux et al, 2006）もあれば、期待はプレッシャーと同義語ではないとしている研究（Patrikakou, 1996）もある。したがって、今後、期待の定義について明確にしていくと共に、複数の観点から捉えた期待の認知によって期待の効果がどのように異なるのかを検討していく必要があると考えられる。2つ目の問題点として、期待を学業期待・進学期待などの一領域に絞って検討するのか複数の領域を取り上げるのか、あるいは期待を総合的なものとして扱うかという領域の問題がある。この点については、期待の領域によって期待の認知が異なることや（Oishi & Sullivan, 2005）、領域ごとの潜在因子の違いが指摘されている（庄司・藤田, 2000）ことから、期待を分類し、構造を明らかにしていく必要があると考えられる。第3の課題として、認知の多様性の問題がある。期待の認知を一つの側面から取り上げている研究は多いが、従来の期待の認知では十分に説明できない点もあると考えられるため、複数の認知について今後取り上げていくことが

求められるであろう。特に、子どもの期待に対する感情に焦点を当てた複合的な尺度を作成し、期待への対処方法・期待に対する耐性・向社会的行動・非社会的行動・反社会的行動などとの関連を検討していく必要があると考えられる。

また、親の期待の受けとめかたについては、上地(2000)が、青年期の5つの心理的離乳の側面を指摘しているように、発達の要因も考慮に入れる必要があるであろう。子どもが、発達し、親と心理的な分離を図っていく際に親の感情、期待、願望などを必要以上に気にしなくなるという親への同調・気遣いの減少、さらには、親の期待や依存に対する子どもの嫌悪感が減少するという親の期待への嫌悪感の減少も指摘されているため、発達の要因を考慮して研究を行う必要があるのではないだろうか。

親の期待を親側の観点からみた場合、親が期待する領域や事柄についての研究はなされているが、親が子どもに期待する心性や感情に焦点をあてた研究はほとんど見受けられないという問題がある。社会調査データはあるものの(例えば、三浦, 2007, 第6章・第7章)、心理学的な視点からの解明は進んでいない。特に、親の期待の子どもの認知に関連すると思われる期待の方向性(ポジティブに期待するのか、ネガティブに期待するのか)あるいは、期待の正確性(子どもの能力や特性の正確な評価に基づいて期待しているのか)といった観点からの検討も不十分であると考えられる。また、親子間の関係性の中で期待を捉える上で重要となると考えられる子どもに期待をどのように伝えていくかという伝え方についても研究を行っていく必要があると考えられる。今後、以上のような観点から親の期待研究を行い、親子双方の研究によって得られた知見を統合していくことが重要な課題になるであろう。

引用文献

- 赤星麗佳(2007). 親の期待が子供の自己効力感と孤独感に及ぼす影響. 東亜臨床心理学研究, 6, 61-62.
- Benner, A.D., & Mistry, R.S. (2007). Congruence of mother and teacher educational expectations and low-income youth's academic competence. *Journal of Educational Psychology*, 99, 140-153.
- Brain, M.W., & Resse, C. (2007). Parental influences on social anxiety: The sources of perfectionism. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 55, 282-285.
- Chen, H. & Lan, W. (2006). Adolescents' perceptions of their parents' academic expectations: Comparison of American, Chinese-American, and Chinese high school students. *Family Therapy*, 33, 113-118.
- Crystal, D.S., Chen, C., Fuligni, A.J., Stevenson, H.W., Hsu, C.C., Ko, H.J., Kitamura, S., & Kimura, S. (1994). Psychological maladjustment and academic achievement: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and American high school students. *Child Development*, 65, 738-753.
- Englund, M.M., Luckner, A.E., Whaley, G.J. & Egeland, B. (2004). Children's achievement in early elementary school: Longitudinal effects of parental involvement, expectations, and quality of assistance. *Journal of Educational Psychology*, 96, 723-730.
- Goyette, K., & Xie, Y. (1999). Educational expectations of Asian American youths: Determinants and ethnic differences. *Sociology of Education*, 72, 22-36.
- Guiping, J., Shulan, J., & Qicheng, J. (1993). Expectancy of Chinese parents and children's cognitive abilities. *International Journal of Psychology*, 28, 821-830.
- Jacobs, J.E., Chhin, C.S., & Bleeker, M.M. (2006). Enduring links: Parent's expectations and their young adult children's gender-typed occupational choices. *Educational Research and Evaluation*, 12, 395-407.
- 上地玲子(2000). 青年期後期における親からの心理的分離を測定する尺度の作成と妥当性の検討. 学生相談学研究, 21, 1-15.
- 川上善朗(2003). 自己充足的予言. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・橋政男・箱田裕司(編)心理学辞典 有斐閣 p.331.
- 河村照美(2002). 大学生における親からの期待に関する研究 - 面接・動的家族画をめぐって - 家族心理学研究, 16, 95-107.
- 河村照美(2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連. 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 木澤光子(2004). 思春期の心性に関する研究(Ⅱ) - 親の期待との関係 - 岐阜女子大学紀要, 34, 53-59.
- Liu, R.W. (1998). Educational and career expecta-

- tions of Chinese-American college students. *Journal of College Student Development*, **39**, 577-588.
- Madon, S., Guyll, M., Spoth, R.L., Cross, S.E., and Hilbert, S.J. (2003). The Self-fulfilling influence of mother expectations on children's underage drinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1188-1205.
- 松本恒之・渡辺恵美子 (1993). 親からの期待に関する縦断的研究 東洋大学児童相談研究, **12**, 35-51.
- 三浦 展 (2007). 格差が遺伝する！子どもの下流化を防ぐには 宝島社
- 村田貞雄 (1999). キレル若者達 名古屋学院大学付属図書館報, **11**(1), 1.
- 永井暁子 (2006). 友達の存在と家族の期待 玄田有史 (編) 希望学, 中央公論新社, Pp.61-107.
- 中山勘次郎 (1992). 子供に対する母親の期待とその発達の傾向 上越教育大学研究紀要, **11**, 1-12.
- Oishi, S., & Sullivan, H.W. (2005). The mediating role of parental expectations in culture and well-being. *Journal of Personality*, **73**, 1267-1294.
- 岡田尊司 (2004). パーソナリティ障害いかに接し、どう克服するか PHP 研究所
- Patrikakou, E.N. (1996). Investigating the academic achievement of adolescents with learning disabilities: A structural modeling approach. *Journal of Educational Psychology*, **88**, 435-450.
- Salimi, S.-H., Mirzamani, S.M. & Shahiri-Tabarestani, M.S., (2005). Association of parental self-esteem and expectations with adolescents' anxiety about career and education. *Psychological Reports*, **96**, 569-578.
- 塩田芳久・村上英治・大橋正夫 (1956). 親の期待と子供の願望 (第一報告) 名古屋大学教育学部紀要, **2**, 56-68.
- 庄司知明・藤田尚文 (2000). 子供からみた親の期待について - 親子関係診断尺度 (EICA) との関連から - 高知大学教育学研究報告, **59**, 55-68.
- Simons-Morton, B.G. (2004). The protective effect of parental expectations against early adolescent smoking initiation. *Health Education Research*, **19**, 561-569.
- Singh-Manoux, A., Fonagy, P., & Marmot, M. (2006). The relationship between parenting dimensions and adult achievement: Evidence from the Whitehall II study. *International Journal of Behavioral Medicine*, **13**, 320-329.
- Stephanie, M., Max, G., Richard, L.S., Susan, E.C., & Sarah, J.H. (2003). The self-fulfilling influence of mother expectations on children's underage drinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1188-1205.
- 田中宏二・小川一夫 (1982). 教師職選択に及ぼす親の影響 - 子の認知した親の期待と職業モデル - 教育心理学研究, **30**, 257-262.
- 谷脇のぞみ・藤田尚文 (2006). 親の期待と養育態度が子どもの自己調整能力の発達に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告, **66**, 49-60.
- 遠山孝司 (1999a). 両親からの期待と子どもの期待に対する反応の関係: 親子関係に着目して (平成10年度教育心理学専攻修士学位論文概要) 名古屋大学教育学部紀要, 心理学, **46**, 321-322.
- 遠山孝司 (1999b). 親子関係がよいと小・中学生は親の期待にこたえようと思うのか? 名古屋大学教育学部紀要, 心理学, **46**, 227-234.
- 梅田香里 (2003). 子どものやる気に影響を与える要因 *Culture & Communication*, **15**, 12-16.
- Wang, L.-F., & Heppner, P.P. (2002). Assessing the impact of parental expectations and psychological distress on Taiwanese college students. *The Counseling Psychologist*, **30**, 582-608.
- 山田耕路 (2004). 九州大学農学部および生物資源環境科学府の教育システムについて 大学教育 (九州大学), **10**, 107-117.

(受稿3月21日: 受理5月7日)